



Title	Friedrich-Wilhelm Marquardt, "Exegese und Dogmatik in Karl Barths Theologie"
Author(s)	宇都宮, 輝夫
Citation	基督教学, 9, 28-31
Issue Date	1974-06-10
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/46302
Type	other
File Information	9_28-31.pdf



[Instructions for use](#)

Friedrich-Wilhelm Marquardt,

“Exegese und Dogmatik

in Karl Barths Theologie”

(in: Karl Barth, *Die Kirchliche*

Dogmatik, Registerband, EVZ-

Verlag, Zürich, 1970, S. 649-676)

この論文は短いものながら、そこに示されたバルト研究の意図及至方向そのものの新らしさによって、多くの注目を集めている。これに対しては、その問題意識の新らしさを踏まえた上で、今後種々の方面から批判がなされるであろうが、ここでは、紙数の関係上、論旨を紹介し、問題点を指摘するに留めたい。

マルクヴァルトは先ず、一般的に考えられているバルトの教義学に対する無時間的、超時間的、非歴史的企図という表示を否定し、バルトが教義学的思惟の時代制約性を意識していた事を指摘する。彼は『教会教義学』第一巻の序文を引証して、バルトに於ける教義学の時代規

定を内容的に説明し、バルトにとって彼の『教会教義学』は切迫して必要と考えられる政治的解明をその目的としていたと主張する。従ってマルクヴァルトによれば、『教会教義学』は徹底的に政治的に関連づけられるべきであり、それ自体政治的にも読まれるべきなのである。

そこで彼は、『教会教義学』の原理である啓示論にはどのような歴史的批判的意識が内在しているのかを把握するために、この政治的關係に於いて表われている『教会教義学』の政治的社会的歴史意識をその他の神学的同時代者達の歴史的批判的歴史意識と比較し対決させるというこの論文全体にとっての問題を設定している。

マルクヴァルトはその具体的論述を先ず「現実性の優位」(Der Vorrang der Wirklichkeit)というバルトの思惟の特質を指摘することでもって始めている。「現実性の優位」としては、①教会の優位、②説教の優位、③聖書テキストの優位が挙げられるが、自己の教義学を聖書テキストに基づいて展開するというバルトの態度の故に、③が特に強調される。バルトはテキストに於ける「異質な」(fremd)もの(例えば処女降誕、昇天等)を「保持する」(aushalten, aushalten)事が出来ると考えているが、マルクヴァルトはこのことをバルトの解釈学の根本

形式と規定する。そしてこの規定が以後の叙述の展開の中心となっている。

彼はバルトに於ける歴史的批判的方法の徹底化としての解釈学的方法を考察するに当たり、新約聖書のキリスト論を例としてとりあげる。彼によれば、バルトは、新約のキリスト論が史的イエスの宗教的信仰的評価によって成立しているという新約聖書学の成果を承認しつつも、次の様な問いによって、これを内容的にも歴史的にも新しい、より深いものに変えようとする。即ちバルトは、イエスに対する弟子達の歴史的評価に於いては、その決定的主張（イエスは評価されたところのものになつたという主張）が結果としてではなく前提としてのみ理解されようとしているし、また理解され得るといふこと、いわば *petitio principii* が重要なのではないかと問うのである。この問いは、聖書テキストを解釈の目標点にするのみならず、出発点にもするという事を意味しており、それ故マルクヴァルトはこのことを「バルトの解釈学の鍵」、「バルトに於ける現実性の優位」と呼んでいる。そして解釈学的循環を本質批判によって突き破らず、むしろそれ自体を凡ての歴史的批判の標識にし、釈義者の批判の可能性に対するテキストの「現実性の優位」を認知

するバルトのこの態度を、マルクヴァルトは歴史的批判的方法の徹底化として評価しようとする。彼によれば、テキストの理解し得ない「偶然的なもの」、「客体的なもの」、「事実的なもの」を *petitio principii* によって、理解の結果としてではなく、前提と開始として妥当させる場合には、それは批判的分析の最終段階であり、同時に理解の第一段階なのである。マルクヴァルトは、「神の啓示」と呼ばれて来たものは、テキストに於けるこの「偶然的なもの」、「客体的なもの」、「事実的なもの」であると考え、それを本来の最後の「現実性の優位」として位置づける。

バルトの理解過程は、他の解釈学的に反省された神学の様には、歴史的批判的に秩序付け得るもの、つまり十字架に於いて始まらず、むしろ理解し得ず、比類のない、偶然的事実的なもの、つまり先在、処女降誕、復活、昇天等についての「あり得ない」言説への固執でもって始まる。このことは、マルクヴァルトによれば、バルトの根本体験に関わる。それは、歴史的現象の「客体性」、「対抗性」、「事実的にのみそこにあり私に対立してあるもの」(nur faktisch Da- und mir Entgegensein) の体験である。このことが、歴史的批判についてのバルトの

理解を質的に変化させたのである。

彼によれば、バルトの歴史の批判は過ぎ去った時代の再構成だけでなく、来るべき時代の構成をも求めるのである。この二重の機能が、バルトの歴史の批判をその他のアカデミックなそれとは質的に異なるものとしているのである。従って、新約聖書に於いて与えられたキリスト称号は、歴史的批判的に、時代的制約の中でイエスに与えられた称号として理解されるのではなく、むしろ歴史的批判的に、イエスが将来我々の願望にとってなつて欲しいものへの「見越し」(Vorgriff)として理解されなければならぬ。その場合に初めてそれは理解されるのである。それ故同様に、イエスの総てのキリスト論的称号授与の正当性は、単に歴史のアカデミックに、即ち解積学的確証と史的探究という形式に於いて与えられるばかりでなく、歴史的实践的にも与えられねばならない、と主張される。

この歴史的实践ということが(それは社会的、政党政治的实践なのであるが)、極めて強調されており、それをマルクヴァルトはバルトの認識論に関連づける。彼によれば、バルトにとって神学者の实践とは、「理論」の補足的支えではなく、認識論の拒否、より正確には「イ

エスの語ったことを行うこと」による認識論の新たな構成なのである。そこからのみ神学の対象の対象性は歴史のアカデミックにも反省され得るのであり、バルトはそれを通して、マルクス『フォイエルバッハに関するテーゼ』に於ける第二テーゼの意味に於いて、神学の対象の対象性を証明しようとしたのである。以上を総括してマルクヴァルトは、歴史的批判と歴史的实践は相互に制約し合うが、後者は前者の可能性を基礎づけるのであり、ここで初めて解積学的循環が閉じられると言う。

以上がこの論文の概略であるが、これは、マルクス主義的な立場からバルト神学を新たに見直したものであり、その結論は、やや行き過ぎている感がしないでもない。そのことは、バルトの個々のテキストの理解に関して、具体的に認められる(例えば本論文の六七四頁に於ける『教会教義学』第四卷第一分冊一七七頁の解釈などはマルクヴァルトの読み込みという印象が強い)。しかしその反面、この論文には、注目するに値する特質も存在する。それは、バルト神学をバルトの歴史的状况から解釈するという、従来当然なされるべきであったはずの事をこの論文はあらためてなしており、従って、『教会教義学』についても、それを普遍妥当的なものとして、それ

自体に於いて観察するのではなしに、時代的制約の中に於ける相対的なものとして、それを取り巻く時代状況から観察していることである。それによってこの論文は、一貫してバルト擁護の立場に立つものでありながら、既成の理解を踏襲する従来のバルト研究に対して、一つの新たな可能性を開拓し、バルト研究の更に豊かな種々多様な在り方の存在することを例示したと言えるのではなからうか。

(宇都宮輝夫)

昭和四十八年度行事報告

○第十二回大会 七月十六日 於・酪農学園大学

理事會

總會

昭和四十七年度行事、會計、會計監査報告を承認
決議事項

一、公開講演会は十一月初旬に室蘭地区にて行なう。

二、次期大会は七月十五日(月)、藤女子大学において行なう。

三、『基督教』第九号の編集委員として次の各氏を選出。

浅井正三、宇野光雄、大山綱夫、近野 亘、菅沼英二

滝沢武人、土屋 博、山崎保興

研究発表會

一、ハアダムの黙示録Vについて 北海道大学 滝沢武人

二、エレミヤ書における荒野 モチーフの伝承史研究 酪農学園大学 菅沼英二

三、ルネッサンスの「社会教説」における理念 カトリック司祭 荒木関巧

四、学生・生徒の宗教性の成長に対する実証的研究 日本キリスト教 中村陽三
教育研究所

五、「理解」ということ 北星学園大学 兩具行麿

○公開講演會 十一月十日 於・室蘭カトリック女子高校

「現代人の祈り」 札幌カトリック・センター 浅井正三

「聖書の人間観」 北星学園大学学長 秋田 稔

○会員の業績調査実施 二月十五日